

平成29年度第2回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招集年月日 平成29年 9月19日(火)
- ◎開催日時 平成29年 9月28日(木) 午後1時～2時23分
- ◎場所 伊那市役所 庁議室
- ◎出席者 白鳥市長、松田教育委員長、宮脇教育委員長職務代理者、田畑教育委員、原田教育委員
- ◎欠席者 なし
- ◎出席職員 北原教育長、大住教育次長、吉田学校教育課長、小松生涯学習課長、捧文化振興課長、宮下スポーツ振興課長、中村指導主事、唐木指導主事、山崎教育総務係長
- ◎出席関係者 尾形西箕輪中学校長

1 開 会

大住教育次長

皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、ただ今から伊那市総合教育会議を始めまいります。なお、本日、協議事項の(2)にICT機器導入による成果がございますが、現場の立場で西箕輪中の尾形校長先生においでいただいておりますので、よろしく願いいたします。それでは、はじめに白鳥市長からごあいさつをお願いいたします。

2 市長あいさつ

白鳥市長

久しぶりの雨が降りまして、きのこ採りのみなさんも喜んでいるような気がします。この雨も今日の夕方には上がるようですが、比較的安定した今年の秋のシーズンだと思います。

今日は伊那市総合教育会議ということで開催いたしました。今日、衆議院の解散ということで、これから全国的にいろいろな選挙でかしましいわけではありますが、私たちにしてみると、地方創生ということ、この言葉が失われずに、しっかりと地方創生が息づいていくことを願っているわけでもあります。そうした中においても地方創生が形としてしっかりとあり続けるためには、やはり働く場所、つまり産業がきちんとしていることだと思います。製造業、また、一次産業である農業、林業、あるいは、観光といったところが、これからしっかりと広がりを持っていくことが第一であるということ。もう一つは、医療・福祉がしっかりとしているかどうか。もう一つは、文化・芸術があるかどうかということも、地方にとっては重要なポイントだと思っています。更にもう一つは教育です。教育が地方を変えていく一番の原動力になりますので、私たちが過去に学んで教育をしっかりとやって、地域の将来をしっかりと任せる子どもたちを作っていかなければいけないと思います。

今、伊那市はドローンが非常に注目されております。ドローンによって松枯れの様子を調べるだとか、あるいは山にある木の番地管理をするだとか、あるいはものを運んでくる、ほかにもいくつかあるんですけど、ドローンの活用の最前線にある。また、国土交通省と一緒にやっております自動運転、これも伊那市長谷の道の駅を中心

にして、中部5県では初めての取り組みということでもあります。そのほか、スマート農業、スマート林業もIoT推進ラボの中で始まっており、時代の最先端を地方の都市であるこの伊那市でやるということは大変意義深いものがありますので、是非そうしたことを成功裏に導いて、日本の中でも最も注目されるような、新しい時代のニーズを発信していきたいというふうに思います。特にICT教育、西箕輪中学校の尾形校長を中心に展開している部分があります。これの更なる広がりをどういうふうに持っていくのか、それから、まだ短期間ではありますけれど、効果がどうなのかということをよく今日は話を聞きながら、先生にとっても、また、生徒にとってもプラスになっているのか、来年度の予算編成が始まりますので、そうした効果について検証して来年度予算の中に導入をするのかしないのか、また、するとすれば、どのような学校、小学校か中学校か、小規模校か大規模校かを検討していかなければいけないと思います。今日はいつもより短い時間ではありますけれども、内容ある会議にしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

大住教育次長

続きまして、松田教育委員長、お願いいたします。

3 教育委員長あいさつ

松田教育委員長

8年前に特認校になりました新山小学校の地域の連携とICTを活用した取り組みの様子が昨日の信濃毎日新聞に大きく取り上げられておりましたので、みなさんご覧になったと思います。伊那市の小規模校の取り組みは大いに評価できると思っております。全校54名の高遠北小学校では、伊那市の教育委員会が最重要課題であるとしてらえている「暮らしのなかの食」を全校で、高遠そばに取り組みまして、大人顔負けのそばを打ち、地域のみなさんの賞賛を受け、特色ある取り組みとして成長しつつあると思っております。また、全校65名の長谷小学校の歌声は文部科学省の視察官を驚かせたと聞いておりますし、音楽会に来た地域のみなさんが発表の見事さに感涙されていると聞いております。また、全校生徒42名の長谷中学校では、花壇作りで知られているところではありますが、今年度も県の中央審査会で優秀賞を受賞しまして、実にほぼ40年近くにわたりまして、毎年のように賞を受けるという足跡を残しています。

今日は伊那西小学校の小規模特認校について、また、今日的課題でありますICT機器導入による成果についてという重要な事項がありますけれども、教育を大事にする伊那市の取り組みの一層の充実につながる協議を期待しまして、あいさついたします。

大住教育次長

それでは、協議事項に入りますので、進行は白鳥市長にお願いいたします。

4 協議事項

(1) 伊那西小学校の小規模特認校について

白鳥市長

最初に、伊那西小学校の小規模特認校についてを議題といたしますので、事務局の方から説明をお願いします。

資料NO. 1に基づき、吉田学校教育課長説明

白鳥市長

この伊那西小学校の特認校であります、あそこにますみヶ丘の平地林、今、名前を募集して検討していますけれど、市民の森というような名称になるのではないかと思いますけれど、この市民の森が近くにあるということと、この森が非常に標高が高いところ、しかも平地林ということで、日本最大の赤松の平地林で67ヘクタールほどあります。そこを活用しながら、また、自然が豊かであるということを見ながら、子どもたちの学習の中に自然科学というものを入れたものがないかと、そんな思いがあります。

ちょうど今、ノーベル賞の選考が始まってくるわけですが、今まで、ノーベル賞を受けた理系の方は、小さいころ、自然の体験を必ずしているんですね。しかも中途半端でない自然体験を自分の中に持っていて、それからだんだんに発展して、いろんな科学、医学だとか、いろいろな分野に行っているということを普通に言っていますので、ものをきちんと見る、観察する、それからいろんな課題をその中から見つけ出すという、そうしたことができるような場所にしたいというのが、伊那西小学校の小規模特認校の姿です。

それで、このことについては、市内の小学生が、天竜川の西側ということもありますけれど、私は、できれば全国から集まってくるような場所になればという夢があります。「日本の科学者は伊那育ち」というのが前からの私の思いなんですけれど、地元の子どもたちもそうなんですけれど、自然科学、あるいは理科系と言いますか、そういう人たちがいろんな伊那で、いろんな自然体験を積んで、行ってもらえたらなあ、そんな思いでこうした特認校の姿を描いております。

講師については、全くの案の段階で、ふるさと人材バンクにこういった人が、ふるさと大使にこういった人がいますよということでピックアップしておりますので、このほかにも極端な話をすれば、でんじろうさんのような、ああいう人に来てもらって伊那西小学校の教授というような形で、授業を楽しくやってもらおうということも可能でしょうし、いろんなみなさんを想定したことに呼べるようになっていけばと思っています。ただ、1年生から6年生まで成長の段階があるので、カリキュラムをきちんとして、成果を見極めながら、1年生の時にはこういう範囲とかと思っています。小規模特認校の市内はもちろんなんです、伊那小学校みたいに、伊那小学校の授業を受けさせたいと伊那に移ってくる親御さんも随分います。伊那西小学校もそういうふうになればと考えておりますので、みなさんの意見をいただければと思います。それでは、今の説明の中で、質問とか、意見とかご自由にください。

松田教育委員長

まず、特認校のねらいと具体的教育活動のところ、1番のところでは、伊那市が大事にしている50年の森林ビジョン、2番では、「暮らしのなかの食」、3番では、ICTの活用、4番では、伊那西は地域ぐるみの公民館活動をしていますので、そういうふうに現在学校が取り組んでいる活動と、そして、伊那市が大事にしていることを連携させて意味付けていく、そういうふうにするのが唐突でなくていいのではな

いかと思いますので、その視点でさらに深めていただきたいなあというのが、1点です。2点目は、「少人数ならではの特色を活かした」ところの1番の主体的に云々というところと、2番の「ひと・自然・もの」とありますが、これを読んでもどこの学校にも当てはまる中身なんですね。もう少し、少人数ならではのとしますと、3点あると思うんですけど、その一つは、機動性のある学校、人数が少ないので、大人数の学校と比べて機動性がある。二つ目は一人の児童に関わる時間が多くなるので、個に寄り添った極め細かな指導ができる。三番目は、今大変忙しい時代ですけど、ゆったり感のある暮らしを保証する、そういう3点に絞り込んで、少人数ならではの特色を明確にしていっていただきたいと思います。

白鳥市長

はい、今、そうした意見があります。(2)については、もっと具体的にということと事例が出されました。ほかにどうでしょうか。

宮脇教育委員長職務代理者

この講師の資料をいただいたんですが、一番はやってくれる人がどういうふうな考えでやってくれるかということが非常に大事になってくると思ひまして、学校の先生は転勤があつていなくなつてしまいますので、アドバイザーみたいな形で一人見てくれるといいのかなあという気がしています。そういう方がある程度コーディネートしてくれないと先生たちにこれをというのは、ちょっと厳しいかなあと、まあ、人が替わっちゃうということもあるので、人の配置はしっかり考えなきゃいけないのかなと思ひます。

白鳥市長

はい、先生も数年で変わつてしまうので、たけた先生がいればですけども、ゼロからやっていくのは壁があるということで、全体を常にコーディネートできる人がいた方がいいんじゃないかという話があります。ほかはどうでしょうか。

北原教育長

先ほどの委員長の意見とも重なるんですけど、伊那市で大事にしている活動がずっとありますので、ここで学びを深めたことが市内のまた学校へバックされる、もちろん、全国的には大きくピアーアールしていくんですけども、市内で共有できるような、例えば、研修や研究や、また、ICTを使って配信して学ぶとか、そういうことをして共有を図っていくことが大事かなあと思ひます。

白鳥市長

はい、特色ある特認校での授業をここだけにとどまらず、ICTを結んだなかで、同時の共同の授業も十分できると思ひますし、そうした環境が必要であれば、来年度予算にも盛り込んで、こういうものを作りましょうということも可能かと思ひます。今は電子黒板を使つたり、もう一緒に授業ができますので、そうすれば伊那西小だけでなくて、いろいろなところで知識として体験ができるかなあと思ひますね。

北原教育長

そうですね。全国的に優れた教師に来ていただければ、そこだけというのは、とて

ももったいないので、同時にほかの学校でも見るができると思います。

松田教育委員長

講師の件ですけれど、ここに並べていただいているのは、人材バンクからとってきたということですが、あまりいろんな方をお願いすると、収集がつかなくなるというか、例えば、伊那小学校の場合には、三枝孝弘先生を招聘して10年に渡ってご指導を受けて、現在があると思うんです。また、「暮らしのなかの食」も内山節先生にお願いして、今日があるわけですが、中心講師をお一人決めて、その方を中心にして、ほかの先生方が登場するというか、そういう中心の講師を選定することが、こういうことについては極めて大事ではないかと思います。

白鳥市長

中心となる講師を決めて、コーディネートできる人と連携しながら、どのような広がりを持たせてやっていくかということですね。ほかはどうでしょうか。

田畑教育委員

学校側の視点だけではなくて、子どもを小学校へ入学させる親御さんたちの切実な思いのなかで、こうなってくると選択肢が広がっていくことは非常にいいことなんでしょうけれど、例えば「本来であれば東小に行くエリアなんだけれど、うちの子は、こちらに入れたいです。」というようなことが情報として、まだまだ浸透していないと思うので、実際に子育てをしている幼稚園とか、保育園にいる親御さんたちに、伊那市の教育として、こういう選択肢がありますよというのをピーアールしないと、後で知って、「本当は来れたのに。」というような事態は避けなければいけないというのと、「来たい。」という子どもの気持ちと親御さんとのすり合わせも出てくると思うので、選択肢が広がるというのはいいと思うんですけれど、その辺のピーアールの仕方だとか伝え方だとか、受け入れ態勢とか、選考とかいうところが明確になるように親御さんたちに説明する必要性が出てくると感じました。

白鳥市長

はい、10月1日からなので、ここで決まったことは早めに保育園とかにアナウンスできるように、それ以外のところにもインターネットで発信しないとまずいと思うんだよね。

松田教育委員長

市外ということですね。

白鳥市長

そう、市外に対して。

北原教育長

この後、定例教委がありますので、要綱等を含めて検討して、今、言われましたように10月には市内の保育園を含めて、該当するところには、ピーアールができるようにと、それから、今、市長言っていたいただきましたように全国的にも発信していく、これも出していく。

白鳥市長

市外から、もちろん県内からも対象なんだけど、そういうのがすぐにはいかないまでも、何年か後にはそういうふうな形になってくると、伊那の教育というのは、総合的な学習の伊那小があり、特認校の新山があり、今後は自然科学の伊那西小があるということで、だんだんに注目されて、もちろん成果を出していかなければいけないんだけど、そういう形が理想かなあとと思いますけどね。

松田委員長

ピーアールの件でいいですかね。北相木村だと思いますけれど、山村留学制度をとっているんですが、この留学制度はユニークで、ご主人は東京に勤めているのでこっちに来れないけれど、お母さんと子どもが移住してきて、卒業する期間そこに住む。そういう留学をしているんですね。これが大成功なんですよ。例えば、伊那市が行う場合も、空き家なんかを提供して、入学から卒業までは、住宅を保障しますよということで、お父さんは来るわけにいかないけれど、家族は引っ越してきて一緒に卒業する、そういうふうにすると、全国から集まりやすいんじゃないかと思うんですね。それも一つの方法だと思います。

白鳥市長

はい、ここら辺は担当から、移住定住の方と連携しないとできないと思うので、そういう方法も有効だと思うので、話をしてみてください。あそこら辺って市営住宅ってあったっけ。まあ、空き家の提供かなあ。ほかにどうでしょうか。

宮脇教育委員長職務代理者

こういうことをやれば、来たいなあという子どもは絶対出てくると思うんですよ。こういうのを読んで「僕もこういうのをやりたい。」という子が出てくるので、とてもいいことだと思います。なんとかうまく行ってほしいと思います。

白鳥市長

保育園のはらぺこというのがあって、あそこは県外からどんどん来るんだよね。やはりそういう中で子供を育てたいという人はいっぱいいるので、あそこは民間がやっているんだけど、北海道から東京、関西、みんな来ているという、楽しいというか、素晴らしい保育をやっていると思うので、こうした小規模校も全国から来て、ここに住んでもらうことも狙うんだけど、そうしたところまで持ち込んでいきたいなあ、まずは、スタートを切っていきたいね。

原田教育委員

多分、そういう人たちは、子どもたちだけでなく、親の方もそういう意識を持ってくるので、おそらく名前も出て、活動が活発になるので、考えただけでもわくわくします。

白鳥市長

あそこに行く子どもたち、横山にも空き家があるし、小沢、平沢にも空き家があるので、そうしたところを上手に提供して、地域の子どもたちが歩いて通学できるよう

な体制が取れば、市営住宅でなくてもできると思うので、そこは特に、沢横4区との連携を、移住定住の担当課と連携をとって、それをまた、ホームページ等でアップしてもらおうと、教授陣については、あまりたくさんいても困るし、専門性が高すぎても困るので、子どもたちにずっと入っていけるような話術と経験がある人、そんな人を選んでいただいてやっていければと思います。今までも、建石先生、野口先生にやってきてもらっているので、このみなさんはなじみがあると思うし、コーディネーターと話をして、「来年度予算の中でこんな講師を呼ぼう。」とか、「有名な人を呼んでもっと楽しくやりましょう。」というようなことでできるんだったら、予算に盛ってもらっていいと思うので、あと、ネットワークでまだ障害がある環境であれば、直さなきゃならぬので、そのところもよく見ておいてください。

田畑教育委員

大局的な話で、もしお答えしていただける話ならばですけど、今、いろんな部分で人口減少が、自分たちの想像しているよりも早い世代で起きてくるということが書物であったりメディアから流れてきて、自分に引き寄せて考えると、3世代先ではなくて、自分たちの子どもたちが60代、70代になった時には、これは不確定な推測かもしれませんが、日本人口が1億人を切ってくるという推測のなかで、おそらくこのエリアでも毎年度末に入学してくる子どもを見ると、伊那西小学校だけじゃなくて、減っていく傾向が顕著になった時に、今、市長のお話を聞くと、それぞれの学校の特色を持って、全国的にこの学校に入学したいと移住定住を選んでもらえるような教育のメッカにこの小学校単位で特色を持って学びができるようなエリアを考えているんだというようなことをどこかで発信してもらえると、何となく人数が少なくなってきた、維持できないので、人を集めているんだというマイナスイメージでない、事実に基づいた市の対策みたいな感じで、発展的にとらえていくということが、発信の仕方によっては、できるのではないかと思ったんですが、その辺、市長としてはどんな感じで考えていますか。

白鳥市長

まさにそうだと思うんです。今の高校再編なんかは最たるもので、数合わせでやっていこうなんていうのは、だめだと思うんですよね。地域をどうしていくかということ、高校再編に当たっても考えていかなきゃならぬと考えていて、高校再編と同じだと思うんだよね。人口減があるので、じゃあ、特色あるところで子どもたちを集めましょうというのではなくて、ここにいる子どもたちが将来もここに住み続けられるような仕掛けを常に現場でやっていかなきゃならないと思っていて、教育現場でも、社会のなかでも、家庭でも同じなんだけど、それをやっていく。

もう一つは、個人的にはね、生活スタイルが大きく変わっていくと思うんだよね。今まで、大都市中心で来ているんだけれど、ありっこない過去なんだよ。つまり、生産性が全くなくて、食べ物を作れない、飲料にしても水を作れない、消費しかないうところ、これって早晚小さくなっていってしまうと思う。地方が小さくなってなくなると、すぐに都会がなくなる、国は、政策として、地方こそこれからもっと大事にしていく、そういうなかで自活できる地域づくり、そこで余ったものが都会に流れる程度でいいと思うんだよね。これは、食べるものだけじゃなくて、エネルギーも同じで、今、伊那市が「伊那から減らそうCO²」、あるいは、「自然エネルギーを中心にした社会構造を作りましょう」とやっているのも、ある意味、小規模特認校、あるいは生

活スタイルが非常におしゃれだと、時代の先端を行っているよと、総合的に見ると地方都市のこういうところが一つのモデルだよというところがあちこちできていると思っている。それを狙っていく、最終的にはね。学校のことでもそうだし、エネルギーのことでもそうだし、農業・林業のことでもそうだし、地方こそ日本を変えることができる場所だとの思いでいます。だから、自然科学だ、「暮らしのなかの食」だ、エネルギーについても、自活ができる地域だと、それが100%に行かなくても、100%を目指して行って、50%でも60%でも行けば、素晴らしいと思うんだよね。そういうのをいち早く作り上げていくことではないかと思っている。

白鳥市長

ほかはどうでしょうか。

松田教育委員長

ちょっとデメリットのことも言っておいた方がいいと思うので、学校の特に校長先生が神経をとがらせているのが、定数管理なんですね。定数管理というのは、学級数がいくつできるとか、そういうことですけれど、例えば、児童1名の移動によって、2つあった学級が1つになりますと、それが専科に連動したりすると、教員2人が減る。これは学校としては大変なことになりますね。そういう定数管理について、学校が神経をとがらせているということも心の中に置いておいてもらって進めていただきたいということを是非お願いしたいと思います。その意味でも冒頭市長さん言われたように、全国から来ていただく、そういうところに視点を置いて、小さいところから集めてくるのではなくて、そこへ軸足を置いてもらいたいなあと思います。

白鳥市長

伊那西小学校にしても、市としてはこういう方向で動くということですので、例えば、先生の配置にしても市費で入れるということもあると思うんですね。そこら辺はこれから中身をもんでいく中で、どのようなカリキュラムで6年生まで、あるいはその先までというところが、はっきりすれば予算措置をしながらやっていくということだと思うんです。初年度からハナマルの状態にいけるということではないので、やりながら変えていくということではないかと思いますけどね。

白鳥市長

では、この件については、担当の方で早急に内容を詰めてもらって、10月はすぐですけれど、来年の予算とかカリキュラムが進んでいくようお願いしたいと思います。

(2) ICT機器導入による成果について

白鳥市長

続きまして、ICT機器導入による成果ということであります。

資料NO. 2に基づき、吉田学校教育課長説明

引き続き、尾形西箕輪中学校長より、機器導入による授業実践への成果について説明

白鳥市長

かなり効果が出ている、そんな感じがしたんですけども、私も授業を見させてもらって、まだ、よちよちっぼい先生もいたんですけど、もうあれから大分経っているので、すらすらと使っているのかなあという思いがあります。どっちにしても子どもたちの習熟度が非常に速いので、先生たちよりも逆に子どもたちの方がすらすら使っちゃっているかなという印象がありました。ひとつ、ここで聴きたいのは、まだ、成果そのものはわからないんですけども、理解度が増した、例えば、試験の点数が上がっているようなことがあるのか、まだこれからなのか、どうですか。

尾形西箕輪中学校長

そこはまだ入って3か月目くらいですので、もし判断するとすると、今度の定期テスト、中間テストかなと思うんですけど、あるいは、単元末の教科問題ではできるかと思うんですけど、まだ、それに特化した取り組みはこれからということですよ。

白鳥市長

少し性急すぎるかもしれません。今、西箕輪中学校、それから長谷中学校にも入っているわけですけど、小学校の話は4校か、どこか聞いている。

吉田学校教育課長

例えば、小学校ですとタブレットを使って、中学校では、タブレットを直接使うというお話はなかったかと思いますが、その中で教科の授業をやっていくということもあります。それをまとめて成果をやっていくというような取り組みをやっておりまして、その中でも子どもたちの持っている力を先生たちが把握しやすいということなどは聞いております。小学校に入ったのが夏休み明けということですので、ここまでのものはまだできていないところであります。

白鳥市長

中間でも、どんな様子か見に行くように。

吉田学校教育課長

はい、行くようにします。

白鳥市長

では、質問、ご意見をいただきたいと思います。

松田教育委員長

授業参観をさせていただきまして、数学、社会、国語、理科、共通しているのは、先生と生徒の関係がなぜ共通してよいのかなと思いました。先生方に気持ちの余裕があるからだと思いました。それはなぜかと言いますと、次々と問題提起や学習問題が用意されていて臨機応変に出せるので、そういうものが先生の気持ちにゆとりを持たせる。そういうゆとりが教師と生徒との関係をよくしていく。大事なところが見れたなあというのが一つです。2番目は学習原理で最も大事なところは、個の学びをどう全体に広げて共通化していくか、考え合っていくかということがとても大事なんですけど、書画カメラというのは、非常に便利で、子どもが書いたものを映せばぱっと

出るので、これが非常に効果があるなあということを見せていただいた授業では感じてきました。

白鳥市長

どうですか、自分がやっていた時の授業と比較したときには、はるかにいいぞという感じですか。

松田教育委員長

はるかにですか、私は校外学習が多かったので、教室にはいなかった。

北原教育長

私のはるかにいいです。私も授業を見せていただいて、さっきの話にもあったんですけど、子どもたちが集中していると本当に教室が一つになっている、一瞬にしてそれが提示されてわかりやすいですね。私が現場にいるころには、OHPというのがありまして、そこへ一生懸命ものを書く、または、トラペンというのがありまして、コピーしてそれを映すというようなことをやったんですけど、授業でも私はトラペンを持って行ってそれを映してやることができましたし、こんなに鮮明ではなかったですし、書いていることがよくわからない。しかし、これは本当によくわかるので、まず集中する。子どもの活動したものがそのまま出てきますので、先生が把握していて、「これ言って。」というところまでできるんですね。昔は、「ちょっとこれ言って。」と言って前へ出てくる間に忘れちゃったり違うことを言い出す。「あれ、そうだったの。」って、これが様々な子どもの考えが過程も含めて出ていくということは、聞いている方は、「ああ、何ちゃんは どうしてそういうところに行ったのかなあ。」とその経過がわかると自分とつながっていくんです。「ああ、自分の考えはそこまで行っていなかったけれど、もうちょっと突っ込めばよかったんだ。」ということに関しては、非常に優れているなあと思います。もう一つは、授業の準備、昔は模造紙に書いたり、OHPシートに書いたりしたんですけど、そのまま出せますので、教員の負担軽減、時間短縮を言っていますけれど、こういった面では非常に大きいかなあということだと思います。

白鳥市長

ほかはどうでしょうか。

田畑教育委員

デジタル教科書、それから、ドリルソフト、eライブラリーは研究する価値はあるんだろうなと思っておりまして、ある勉強会で東京の私立の先生とお話ししたときに、もうこれを長く使っていらっしゃって、そこは私立の高校なので、生徒さんたちの環境も整っているんですけど、ある程度学習が進んできたときには、事前に先生が授業風景を録画してあって、お休みした人にもそれが見られますよと、それで、そこは不登校がない学校だったんですけど、むしろ、先生の方から夏休み中に勉強してほしいことを、先生が自宅とか職員室でソフトを使って、自分でしゃべって授業をしたものを、事前に「これ、見ておいてね。」と生徒に投げたら、生徒が夏休み中に見て、休み明けの授業は反転学習で、あの教えてもらったことを通じて何をやったのかということを経験の時間の中で、切り替えているというようなところを見せてもら

った場面って、せっかく、こういう機器を入れると、一部、上澄みだけ使って、使った気になっていると2年経って機材が古くなって、非常に高価なものに投資したのに使えなくなってしまうということが往々にしてあることなんです、やはり、こういった教材をベースにして、自分たちの準備時間とか、負担を軽減してうまく活用するための研究会とか勉強会みたいなものをすることによって、本当に多忙感を解消しつつ子どもと議論できるような先生方が増えていったらものすごくいいなあと、今、お話をお聞きしていて思いました。

白鳥市長

ちょっと、20分までだったっけ。もう少し時間を使いたいんだけど、弱っちゃったね。今の話で、校長先生、これからいろんな学校になるべく早く導入していきたいという考えでいるんですが、成果としては、先生にもプラスになっているし、生徒にもプラスになっているよと、後は結果がどうかというところがポイントになると思うんですが、とは言え、導入していく中で、さっきソフトの話がありましたよね、例えば、一つの学校、数学で6万というのは全然高いとは思わないので、それをどんなものがほしいのかとか、どういうものが必要なのかということは、学校の先生たちが集まったなんとか研究会を作ってもらって、その中で、「こんなものが必要だ。あんなものが必要だ。」というものを用意していく方が、教育委員会で「これ、どうでしょうか。」なんてやるよりよほど、効果が出ると思うんですね。そういうのってできましかね。研究会は。

尾形西箕輪中学校長

まだ、伊那市の学校にはそうしたものが入っていないところで集まって、使っている方が少ないと、机上や他校の実践から出てくるとは思いますが、タブレットに入れるアプリ等はたくさんあるんですけれど、文科省の方ではとにかく今回、西箕輪に入れたような、全教室に大きく見せるものと、専用のノートパソコンと書画カメラ、それからWi-Fiがあって、デジタル教科書があれば、ほぼそれでいけるんじゃないかと思えます。

白鳥市長

箕輪とか、塩尻、長野、松本とか入っているという。

尾形西箕輪中学校長

それは、タブレットとか、個別の実態に応じて定着活用を図る、授業に活かすのではなくて、個人学習と言うか家庭学習と言うか、復習とかに活かせるものが市販されていますので、長野市、松本市では市教育委員会単位でのライセンスで入れていただければ、各学校で入れるよりも割安で入って、伊那市でも入れていただければ、どの小中学校でも使える。どの子にも使えるということで、家庭でもパソコンがあれば、個人アドレスが来ますので、それでいくらかでもアクセスができます。家庭にない環境のお子さんには学校でタブレットでやっていいよってやれば、ある程度の平等感は担保できるのではないかと思います。

白鳥市長

夏休みの宿題なんか、できるやつにはどんどん出せばいい。

北原教育長

今の件ですけれど、去年のICTの推進委員会の時に、尾形校長先生が「プロジェクターと書画カメラが是非欲しいんだ。」と言ったら、そういうことを理解できない委員のみなさんは、「それを入れたって。」という意見があったよね。そういうなかでこれが入ってきて、実際やっていく中で見てみるとよくわかるんですけど、今の委員会ですけれども、そういった活用している、また、東部中に市内各校を見てくださっている方がいますけれど、そうした方でプロジェクトを作ってやっていくといいかなと思います。新山小学校は電子黒板なんですけれど、これは小さな学校ですけれど、先生方、どんどん入っていくそうなんです。そうしたら子どもに家庭へ帰って、学習したり通信したりできる形にしたいなど発展した考え方を持っているんですね。やると見えてきたり、更に広がってきたりということがありますので、最低限どんなことをやるか、更にどんなことができるかということについては、今後考えていく必要があるかなと思います。

白鳥市長

研究会というのは、その中でなかなかできないというイメージがあるかもしれないんだけど、私が考えているのは、そうしたソフトの研究も一部ですが、今、中学校に入っていて、これから、大規模校に導入するのがいいのか、中規模校がいいのかとかですね、小学校1年生から2年生に導入するのがいいのか、高学年がいいのかとか、そんなことも中でやっている中で答えを導いてもらえれば、うちが導入するときに、そんなことを考えられるような研究を含めてなんですけれど。

尾形西箕輪中学校長

市の情報委員会というのが構成されているんですけど、そこに各学校から1名ずつ委員の方が来ています。

白鳥市長

じゃあ、そこでできるんだね。これについては、来年度導入することについて、どのような学年なのか、場所なのか、規模なのか、総合的に出してもらって検討してください。それで、情報委員会で参考にしてもらってやるということでもよろしくお願ひします。

白鳥市長

電子黒板はほかの自治体にも入っているの。

大住教育次長

はい、入っています。

白鳥市長

例えば、南箕輪とか、書画カメラ付きの電子黒板は、全部入っているの。

大住教育次長

進度に違いはありますが、箕輪町は先行して大分前に入りました。

白鳥市長

その辺の様子を聞いておいて。と言うのはね、先生方が異動で回るじゃない、その時に全然違うタイプが入っちゃったり、まあ、共通がいいと思うんだけどね、どこそこの町村から全然使えない人が来ることもあるよね。

大住教育次長

入札の件で、前回業者から提案があるなかで、「仕様がほぼ同じなので」ということで認めた経過があります。そこら辺はどこのメーカーも同じような仕様になっているようです。

白鳥市長

エプソンとNECと。

大住教育次長

そうですね。大体エプソンとNECがほとんどです。

北原教育長

箕輪はプロジェクターよりカメラですので、うちの方がこの形は進んでいると思います。

白鳥市長

ソフトは互換性があるの。

吉田学校教育課長

同じものが使えます。

白鳥市長

どこかで購入したものは、NECでもエプソンでも使えるの。

吉田学校教育課長

使えます。

白鳥市長

それは間違いないね。

吉田学校教育課長

はい。

(3) その他

白鳥市長

次にその他についてお願いします。何かございますでしょうか。

松田教育委員長

ちょっとお願いがあるんですけど、ご承知のように来年度から小学校に英語が正式に導入されてきます。それへの対応なんですけれど、A E Tの予算をぜひ増やしていただいて、各学校に配置ができるように是非考えていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

白鳥市長

全部の市町村で増えるわけですね。

松田教育委員長

そうです。A E Tが全部の市町村で増えるかはわかりません。それぞれの市町村によっていろいろな工夫をされると思うんですけど、伊那市の場合には、あとどのくらいで充足できるか計算してもらって。

北原教育長

時間的にちょうど倍になります。3年生から入りますので、15時間ではあるんですが、4学年分を考えると倍になります。

白鳥市長

教育委員会としての考えを出してもらおうということだね。ほかにその他の項目で何かございますでしょうか。

全委員（なし）

白鳥市長

なければ、伊那市総合教育会議、以上をもって終了といたします。ありがとうございました。